

# 搬送システム

日本小児科学会雑誌 110巻9号 1274~1284 (2006年)

小児医療

## 小児救急医療体制における緊急搬送システムの重要性について

国立成育医療センター手術集中治療部<sup>1)</sup>, 同 総合診療部救急診療科<sup>2)</sup>

小原崇一郎<sup>1)</sup> 清水 直樹<sup>1)</sup> 砂川玄志郎<sup>1)</sup> 佐々木隆司<sup>2)</sup>  
上村 克徳<sup>2)</sup> 本間 靖啓<sup>2)</sup> 中川 聡<sup>1)</sup> 鈴木 康之<sup>1)</sup>  
阪井 裕一<sup>2)</sup> 宮坂 勝之<sup>1)</sup>

### 要 旨

小児救急医療体制に必要なことは、小児の「救命の連鎖」の確立である。トリアージと的確な初期治療の後、危急の小児重症患者は小児集中治療施設へ搬送される必要があるが、重症患者の搬送は容易なことではない。小児救急医療体制のモデルを示すことの一環として、国立成育医療センター手術集中治療部と総合診療部救急診療科は、2003年6月から小児重症患者緊急搬送システムの活動を開始した。

今回、当院搬送システムの概要をまとめ、①搬送中の有害事象に対する当院搬送システムの効果、②当院搬送システムの2年間の実績、について検討した。当院搬送システムが関与した搬送群における有害事象の発生率は、システム化されていない搬送群と比較して低値であり(9% vs. 27%; Odds ratio = 3.9)、重症例ほどその傾向は顕著であった(12% vs. 39%; Odds ratio = 4.8)。また、搬送実績において、当院搬送システムが関与した搬送転院症例の死亡率は、予測死亡率と比較して低値であった(9.3% vs. 12.0%)。

今回の結果から、搬送システムの存在が小児重症患者の予後の改善に有効であるということが示された。的確な初期治療・小児集中治療施設の存在と相俟って、メディカル・コントロールを包含した搬送システムの存在は、小児重症患者の予後を改善する可能性があり、小児救急医療体制の包括的整備に必須であると考えられた。

キーワード：搬送, 小児救急医療, 小児集中治療, Pediatric Advanced Life Support (PALS), 救命の連鎖